

序章

平成二十一年（二〇〇九年）八月三十日、その日は我々自民党にとって絶対に忘れられない日となった。政権交代が現実になった日だからである。

あの日のショックは大きかった。私でさえ、全身から正気しょうきというか、血の気がスーッと引いたのだから、麻生総理（当時）や党幹部が受けた衝撃しょうげきの大きさは、想像そうぞうに難くない。茫然自失ぼうぜんじしつとは、あんな時のことを言うのだろう。

だが、これが現代で良かった。その昔、戦乱の世であったなら、政権が変わるということは、二度と政権に復帰ふっきできないどころか、敗者は勝者によって命までも奪うばわれていたかもしれない。もちろん、現代にあってはそのようなことがある訳ではない。私が今、取あえてそのことをこの場で言うのは、選挙は「選挙戦」と言われるように、まさに戦たたかいそのものであり、選挙をする者は、常にそれだけの覚悟かくごが必要だということである。

そして現代においては、国民の支持を得えられれば、再び政権の座に復帰ふっきできるということである。「現代で良かった」とは、そういう意味である。

ただ、そのためには、一度離れた国民の気持ちを取り戻さなければならない。そして、なぜ国民の気持ち離れたのか、その原因と理由を知らなければならない。

私は国会議員ではない。しかし、政権復帰ふっきしなければならないという気持ちと、今の世の中、この国の将来しょうらいを何とかしなければならぬという気持ちは、人一倍強いつもりだ。

なぜそうなのか、自分でも分からない。もしかしたら、一つの業ごうかも知れない。自民党こそ、政権政党に相応ふさわしいという確信と、黨員としての使命感なのかも知れない。とにかく、私は無謀むぼうにも、なぜ民主党にこれほどの大差で敗れたのかを突きとめ、政権復帰ふっきの手がかりを探さぐることにしたのである。

物事ものごとは何であれ、一つの区切りや節目ふしめとなる転換期てんかんが必ずある。今回の政権交代も一つの時代の区切りである。そして多くの場合、その前兆ぜんちょうもまた必ずあ

るはずである。政治の世界では、一寸先は闇とも言うけれど、前触れは顕著なのである。

米・ソ両巨頭に代表された東・西冷戦の終結は、世界史を塗り替えた歴史的
大転換期であった。あの「大事件、にも前触れはあったのである。ポーランド
の造船労働者のストライキや、当時のソ連の最高指導者であるゴルバチョフ氏
による新思考外交、アフガニスタンからのソ連軍撤退など、いくつもの予兆が
重なり、最後のダメ押しとなったのがベルリンの壁の崩壊である。

戦後の日本の政治史は、自民党を抜きには語ることはできない。民主国家に
あって、三十八年間も政権交代がなかったのだ。その歴史を変えたのが、平成
五年（一九九三年）の細川政権成立による政権交代であった。それは結党以来
の「大事件、であった。

その後、自民党が政権奪取したのも、ドラスチックな出来事だったが、昨年
の平成二十一年（二〇〇九年）八月三十日の衆院選での大敗によって、二度目
の政権下野となったことも、戦後日本の政治史を塗り替える「大事件、となっ
た。そして、二つの「大事件、の立役者となったのは、今、日本の最大の實力
者と言われ、日本のみならず世界から注目を浴びている小沢一郎氏である。

自民党の一部は、冷戦終結によって、日本が西側陣営の一員として、それま
での、世界の平和と経済の安定を支えなければならないという大義までも失っ
たかの如く、自覚も緊張感も失ってしまい、その結果、二度の政権交代を経験
するに至ったのである。そして、日本は未だに行き先が定まらず漂流を続け
ている有様である。

考えるに、その予兆となったのは、東・西冷戦の終結に端を発する国際情勢
の変化であり、政権交代の震源地は党内分裂であった。しかも、それは権力を巡
っての暗闘が表面化したもので、今回の政権交代も、元をただせばその
延長線上にある。権力者が代わるということは、当然、国家の運営権も、国家
の富の分配権者も代わったということである。

しかし、今回のそれは唯事ではない。

「現在の日本は存亡の危機にある。社会秩序は崩壊し、国益を貪欲に追求す
る国際社会の諸国の中で埋没しようとしている。国家の基盤が液状化している
からであり、政治の役割が重視されるゆえんである。（後略）」

これは、新潮四五・二〇一〇年四月号別冊に編集長として寄せた、櫻井よしこの氏の編集後記の一文である。櫻井氏の危機感^{ききかん}は、日本の識者の共通の認識^{しきしや}と思うが、櫻井氏や多くの識者^{しきしや}をして「国家存亡の危機^{こっかそんぼう}、と言わしめた、前代未聞の政治状態をつくったのは、朝令暮改ならぬ「朝令昼改^{ちやうれいちゆうかい}、と、言葉の軽さで迷走^{めいそう}を続ける鳩山総理自身であり、政治的混乱が内閣全体に及び、国民に失望感^{しつぼうかん}を与えていることは間違いない。

このような状態で、内閣がかろうじて保たれているのは、他ならぬ、民主党が掲げている「脱官僚^{だつかんりやう}、の張本人^{ちやうほんにん}、官僚のお陰^{かげ}だとしたら、それはまことに皮肉なことである。しかし、事の本質と、民主党連立政権の全体を考えた時、陰に陽に重大な影響^{えいきやう}を与えているのは、誰の目から見ても、やはり、政権交代の立役者^{たてやくしゃ}となった小沢一郎氏である。

しかし、戦後日本の政治史と、二つの「大事件、を一つの物語として考えた場合、もう一人の主役を抜きにして語ることはできない。そのもう一人の重要な人物とは、元総理大臣の小泉純一郎氏である。この二人の重要人物を対比し、政治家としての二人の足跡^{そくせき}を辿ることによって、戦後日本の政治史の一面が、よりリアルに浮かび上がるのである。

したがって、本書執筆にあたっての随所^{ずいしょ}において、両氏を念頭に置きながら書き進めることを、予め申し上げておきたいのである。

ただ、どうしても執筆の比重は、政権交代直近の政治状態と、「聖域なき構造改革^{せいよくなきこうぞう}、が国民にどう受けとめられ、国民生活にどう影響^{えいきやう}を与えたのか、或いは、政権奪還^{だつかん}はどうあるべきかに比重を置いたものであるということに、ご理解^{たまわ}を賜りたいのである。

私が、小泉、小沢両氏の共通点に気がついたのは、本書を書き出して間もなくのことである。なぜ？どうして？と思考をめぐらす過程^{しこう}で、偶然ではなく自然に、そして必然的に辿り着いたのが、二人の政治家としての経歴と相関関係であった。

二人は共に大政治家であるが、比べてみると実に多くの共通点があることが分かる。

まず第一に、発音は違うものの、名前からして似ているのである。苗字を見ると、文字通り、小泉とは小さな泉で、小沢は小さな沢であり、どちらも小さく、水に縁^{えん}がある。名前を見ても、一方は一郎で、もう一方は純一郎で「純」

の文字がつくが、両方は同義語である。

そのほか、どれだけ共通点、類似点があるか比較してみる。

生年月日は、小泉氏は昭和十七年（一九四二年）一月八日、小沢氏は昭和十七年（一九四二年）五月二十四日であり、学年でみれば小泉氏が一学年上になるが、生まれた年は昭和十七年で同じである。

二人は共に慶應義塾大学を卒業しており、政界に進出したのも、お互いが父君の急逝を受け、その後継として出馬している。初陣も同じで、昭和四十四年（一九六九年）十二月である。

小泉氏は福田赳夫元総理の書生を、小沢氏は田中角栄元総理の書生を務めている。田中、福田両氏は、角・福戦争と呼ばれたほどの政敵だが、元々両氏は、沖縄返還を成し遂げた、佐藤栄作元総理の派閥に所属していて、小泉、小沢両氏の恩師の出自は同根なのである。

佐藤元総理は、後継者に福田氏を望んでいたと伝えられている。だが、実際に自民党総裁選を制し、総理大臣の座についたのは、田中角栄氏であった。福田氏が総理の席に座るのは、その次のさらに次である。

このように、何か因縁めいた関係でつながっている二人だが、その後も因縁はまだまだ続いていくのである。

最近になって、沖縄返還にまつわる密約問題がテレビや新聞紙上などで取り上げられ、沖縄買い戻し説が出回っているが、以前から政治に通じた人であれば、その説は常識だったのである。その「沖縄買い戻し」の実行役を見事にやり遂げたのが、当時の佐藤内閣を大蔵大臣として支えていた、親米派の代表格である福田赳夫氏である。そのような事情からか、アメリカもまた、佐藤氏の後継に親米派の福田氏を望んでいた節がある。ところが意に反して、総理の座を射止めたのは田中氏である。当時、田中氏は自民党の幹事長を経て、通商産業大臣の職を務めていた。ここから始まったのが世に言う「角・福戦争」である。後年、この因縁を引き継ぐのが小泉、小沢両氏である。

田中元総理が、今太閤としてもてはやされたのも束の間、立花隆氏の「金脈追求」によって失脚、その後、ロッキード事件で逮捕の身となったのは周知のことである。そして、実しやかに囁かれたのは、CIAの陰謀説である。

真実は分からない。だが一説には、ロッキード事件は親中派の田中氏がアメリカ離れをしたがために、アメリカが仕組んだ罠だというのである。なにやらミステリーめいてきたが、福田氏のDNAを引き継いだ小泉氏が強力な親米派で、田中氏のDNAを引き継いだ小沢氏が熱烈な親中派であることは、衆目の一致する事実である。

そして、私が両氏を比較してみて気づいたもう一つの共通点は、両氏共に冷徹な人物として世間から見られていることと、自らの身命を賭した覚悟が相手に伝わる凄さを、お互いが持っていることである。小泉氏は総理大臣として政治家の頂点を極めたが、小沢氏もこれまでだろうと思えば、総理になれた政治家なのである。

小泉氏は郵政選挙で、大勢の「チルドレン」と呼ばれる人たちを当選させたが、小沢氏もまた、先の選挙では大勢の「チルドレン」を当選させている。

このように、小泉、小沢両氏には、数多くの共通点、類似点を見ることが出来る。だが、それはあくまでも外形的な面だけであって、両氏の持つ本質的な部分では、決定的な違いが見られる。本来、両氏は似て非なる人物なのである。

確かに政権交代が起きたのは、両氏が与えた影響が最大の理由である。しかし、小泉氏は、にっちもさっちもいかない膠着した財政状態からの脱出と活路を、「市場原理主義」に求めたもので、結果的にそれは失敗したのだが、日本の再生と発展を目指した「大義」は成立するのである。

ところが、鳩山政権の最大の実力者と言われる小沢氏には、その「大義」が見当たらないのである。小沢氏の目的は、権力を握ることだと言われている。そのためには選挙で勝つことであり、選挙が何事にも何物（者）にも優先するのである。

こうした大義のない政治の姿が、実体としてはっきりと現れたのが、沖縄の米軍普天間飛行場の移設問題であり、財政を考えないバラマキの国家予算である。日本が今、どんな国を目指し、どこへ向かって進もうとしているのか、全く分からない。

それよりも、鳩山総理以下、閣僚も民主党関係者の誰もが、今後どうなるのか全く分からないと言うのが、実態なのではないか。いみじくも前述の櫻井よしこ氏は、この状態を指して国の存亡の危機と捉え、液状化した国家基盤を固

めるのが政治の役割と、警鐘^{けいしょう}を鳴らしたのである。

平成二十一年（二〇〇九年）の衆院選直後、早くもこうなることを予言した一人の学者がいた。選挙直後に発売された「正論」平成二十一年（二〇〇九年）十月号に、民主党政権の危うさと今日的問題を予言した論文が掲載されたのである。その論文は、民主党の持つ本質を衝いたもので、中国の故事を引き、これ以上例えようがないほど、誰が読んでも分かるように民主党の本質を喝破したのである。

論文は、「正論」に総力特集として、「やがて日本は日本でなくなる」との表題で企画した中に掲載されたものだが、タイトルは、

「ある寓話 — 其の詐かるや愚かなるのみ」

と題し、サブタイトルに「国民は新政権にどう対峙すべき」と記した、大阪大学名誉教授の加地伸行氏が執筆したものである。ある寓話とは、古代中国の前漢末の篡立者（君位を奪ってその地位に着く人）王莽を例にとったものだが、論文前段の一節を次に掲載する。

総選挙が終わった。好むと好まざるとに拘らず、これからは民主党の意見が政治に大きく反映されよう。

世は、それを民意と言う。民主主義という方式が民意を表現すると言う。そのことを、この九月、政治評論家や政治学者らがあれこれ論じ続けることである。

そういう世の中の動きとは離れて、私は一人の老中国学者として、民主党そのものそして民主党なるものを支持する人々に対して、醒めた見かたをしている。

と言うのは、王朝の興亡三千年の中国史において、民主党の今と何やら類似した例を思い出すからである。

時の熱狂の多くは、紛物に騙されている者の、人の好い歓呼の声である。それが政治と言うものの持つ魔力である。

読者諸賢、以下に語る、古の中国において起った或る一つの物語を御覧ぜよ。

(振り仮名は、筆者にて一部補筆)

全文を紹介できないのは残念だが、こうして古代中国に起きた一つの例をとった物語は、加地氏の手によって民主党と重ね合わせてその本質を解き明かされていくのだが、その内容は、天才的デマゴグ（民衆扇動家）の出現によって、人々が惑わされ、王莽という、元帝の皇后の弟の子どもに王位を篡奪されるという、実話とされる物語なのである。

私はこの物語を読んでみて、もしかしたら民主党は王莽の手口を真似たのではないかと思うほど、政権交代のストーリーとあまりにも似れば似るものなのである。

私は先の衆院選では、北海道三区から四選を目指したが、結果は当選に届かなかった石崎岳前総務副大臣の、選対事務総長を務めていた。事務総長の大役は二度目だったが、選挙戦はそれまでのどの選挙よりも厳しく、日に日にそれはひしひしと伝わってきていた。そして国民の思いや願いも、私には伝わっていた。

ここに、先の衆院選での集会で、石崎岳氏に託して朗読された一編の詩がある。その詩には、国民の願いと心情が、こう込められていた。

幸せは ささやかで良い

ぜいたくは 言わない

安心して暮らせれば それで良い

父さん 母さん じいちゃん ばあちゃん

みんなで作った 日本を

平和に暮らせる 日本を

みんなが誇れる 日本を

未来を担う 子や孫に

残してあげたい 日本を

ぜいたくは 言わない

幸せは ささやかで良い

-

この詩は、いかにも簡潔で純朴な詩である。正直に自分たちの気持ちを表現し、ささやかな願いを実現してほしくて作った詩なのである。そして、この詩には、石崎氏の集会に来た人たちだけでなく、国民全体が抱いていた、何とか、この閉塞状態から抜け出したいという、やりきれない共通の気持ちが込められていたのである。そうした人たちにとって、民主党のマニフェストはバラ色に輝いて見えたのかも知れない。加地氏の言う紛い物とも知らずにである。

加地氏の説いた「ある寓話」の後段は、こう結ばれていた。

-

総選挙は終わった。王莽のこの物語に似たことがこれから始まることになるのか。中央省庁の官僚支配からの脱却という美名の下に行なおうとする〈内閣への権限一元化〉と称する社会主義的独裁の色彩は、民主党が立法と行政とを一体化し、三権分立を否定してゆく序章である。

そこからの系であろう。社会主義者は自国も他国も区別のつかない者であるから、外国人参政権の賦与という、売国的法案を通そうとし、社会主義に薄化粧した、際限なき区切りなき〈友愛〉を広めようとしている。人権擁護法案もまたその一つである。

王莽の物語のように、もともと民主党の政権は机上の空論であるから、長くは持たない。中央省庁の組織をいじり、財源なきバラマキをするうちに、混乱と

失望とが増幅^{ぞうぷく}していく。

いずれ、政界再編成となり、まともな保守系政党が、^{ある}或いは再生自民党が復活ということになるであろうが、そのときには、民主党による社会主義的^{しやうぎん}傷痕が虫食い状態となって残っていて、それを除去^{じよきよ}するために、^{ぼうだい}龐大なエネルギーを必要とし、無駄^{むだ}な空転^{くうてん}が続くことであろう。

清朝^{しんちやう}の文人である趙翼^{ちやうよく}は、その名著『二十二史劄記』^{めいちよ きつ き}において、王莽^{おうもう}が倒れた頃の世間のことばを引き、王莽^{おうもう}の一代を痛烈^{つうれつ}にこう評している。「今の〔人々の〕愚^{おろ}かなるや〔単純にただ〕詐^{たぼ}かるのみ。〔王〕莽^{もう}の如^{ごと}きは、其^その詐^{たぼ}かるや〔その内容自体が、ただ〕愚^{おろ}かなるのみと。」（振り仮名は、筆者にて一部補筆）

私は加地^{かじ}氏の^{ひやうせつ}評説に、甚^{いた}く感銘^{かんめい}を受けた。選挙直後にも拘^{かかわ}らず、民主党の本質を見抜き、余すことなく喝破^{かつぱ}していたからである。そして、^{おそ}畏れ多くて言葉に出すのも憚^{はばか}ることではあるが、その内容は、私が本書の執筆^{しつぴつ}を思い立ったきっかけと全く同じものだったのである。

執筆^{しつぴつ}の理由は他にもあり、それについては別章で述べることにするが、主な理由は、何としても政権を奪還^{だつかん}したいという強い思いがあったからである。そして私は、ずうずうしくも本書のサブタイトルに、「其^その詐^{たぼ}かるや、愚^{おろ}かなるのみ」の言葉^{ちやうだい}を頂戴したのである。